
東都大学大騒動～平次と哀の一日～

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東都大学大騒動〜平次と哀の一日〜

【Nコード】

N5570B

【作者名】

楓

【あらすじ】

東都大学4年生になった平次と、すすく育った哀嬢の、大学祭を舞台にした一日です。平哀or平+哀です。でも二人は付き合っておりません。オリキャラ多少&後編にはちらっと白い怪盗さん出演。以上ご確認頂いて大丈夫という皆様方は是非ご覧下さいませ！『一日シリーズ』は一貫して哀嬢至上です（全てヒロインは哀嬢）話によりカプが変更。必ずあらすじに明記します。それぞれ話は微妙にリンクします。ですが単体でも問題ないかと（after話を除く）作品数が増えましたら時系列順明記予定 以上宜

しく願います（*^ ^*）

前編〈勇者降臨！（前書き）

原作カプ以外受け付けられない——という方には、もしかしたらオススメできないかもしれません。ダイジョブって言って頂ける方は、是非お進み下さいませ！

前編／勇者降臨！

『栄えある、本年度ミス東都の栄誉を掴んだのは

！』

本日晴天。爽やかな秋晴れ。人でごったがえしたキャンパスを、色黒で整った顔立ちをした青年と、少し目尻の下がった愛嬌のある顔立ちの青年が早足で横切って行く。

4

「服部くくくなあ頼むこのとおり！！オレを助けると思って！！」
「だくもくじゃかしい！！アカン言うたらアカンのや！！」

すれ違う人達が『なんだなんだ』と振り返る。騒がしい二人組は、人混みの中を器用にざかざか歩く。

本日は東都大学の大学祭。日本トップレベルの大学だけあって、注目度はとてつもなく高い。入場チケットはプレミア付きで売買され、ニュースやインターネットでも毎年報道されている。

「ホント一生のお願い！服部、可愛い幼なじみいるんだろ！？今日来てるって言ってたじゃん！？マジでこのままだとヤバいんだって！！」

「知るかい！それにアイツとは朝いつペン会ったし、今日はもう会わへん！こっちには女友達と来とる言うてたから、一通り見て回ったら昼過ぎには観光行きよるやる、無理や無理無理！」

「げ　　！！マジかよ　　！！」

「工藤に頼め！工藤に！アイツも今日幼なじみ来とる言うったからな。蘭ちゃんの方がよっぽど女らしいわ！」

「工藤にはもう頼んだよ！でもその幼なじみのコ、先週の米花大学の祭で準ミスになったって。さすがにタイトル持ってるコはマズイよ」

「……蘭ちゃんが準ミス？なんやミスやないんか？」

「ああ、仕方ないよ。ミス米花のコは、芸能人でスッゴいファンがついてるらしいから。それでも接戦だったみたいだから、そのコ相当の美人なんだね……って、そうじゃなくて！もう頼れるのは服部だけなんだよ！」

「泣くな喚くな縋りつくな　　！」

「じゃあ服部！幼なじみがダメならナンパ！いつもみたいにその顔使ってナンパして女の子捕まえてきてよ！」

「だああああ！デカい声で人聞き悪いコトぬかすなシバくどワレエ！アレは向こうから寄ってきよるんや！大体、オレは今から別の用事が………」

「……服部君？」

突然響いた澄んだ声に二人はピタリと言い争いをやめた。立ち止まり目を向けると、人混みの中に、呆れた顔で眉間に皺を寄せた哀が立っている。

「……貴方達、何があったのか知らないけれど、目立ちまくってるわよ?」

「哀チャン!? うわスマンもう着いottaんかいな? 携帯呼んでくれたらエエのに」

「少し早く着いたの。気にしないで」

いつも通り淡々と話すその姿を、平次は上から下まで眺めて――

「……………」

「……………」

「……………」

「……何?」

「……そのカツコ……………」

「……ああ……似合わないかしら?」

哀は気まずそうに自分の姿を見下ろす。

「いや……似合わんちゅーか……………むしろその」

(めっちゃくちゃ!! 似合いまくつとるやんけ!!!)

「せっかく貴方が買ってくれたでしょう? こういう機会がないと、着てあげられないと思って……」

そう言って視線を逸らせて頬を染める姿は、壮絶に愛らしい。

ある事件をきっかけに、事あるごとに平次が哀に服を贈る様にな
って早5年。しかも毎回毎回、普段哀が着ないタイプの服を購入し
てくる。

初めのうちは哀も無視し続けていたが、次第に諦め、今ではたま
に気が向いたなら、贈ったその場で着てみてくれたりもする。

（うつわゝアカンマジで可愛えわゝオレの趣味も捨てたもんちゃう
やんかゝ）

自然と顔が緩んでくる。純粹に、嬉しい。

「全然！めっちゃ！似合うとる！！ホンマ可愛え！」
うきうきと哀の手を取り、じゃあどっか案内しよか？……と歩き出
そうとした時……

ガシッ！！

「！？」

「……………はっとりくうゝゝんんん？？？」

肩にがっしりと置かれた手に、平次は血の気が猛スピードで急降下していくのを感じた。

（ぐあアカン！浮かれて完璧忘れとった！このタレ目　　！）

突然の状況に固まってしまった平次をぺいっと引き離し、哀の両肩をガシリと掴み、いきなり男は叫んだ。

「惚れました！ボクと一日、付き合ってください！-！」

場所を大学のカフェテラスに移し、三人は何とか席を確保し座っ

た。昼食には少し早い時間帯だったので助かった。きつとあと10分遅れたら席は無かっただろう。

「……………で、話は一応理解したんだけど、悪いけれど私小学6年生なの」

「関係ないよ！だって『一般参加』だよ！年齢制限なんてナイ！むしろ若くてオツケー！」

「……………服部君、貴方の友達って、やっぱり愉快でむやみにテンション高いのね」

「やっぱりってなんや」

やってきたウエイトレスに三人分の飲み物を勝手に注文して、平次がジト目で見つめる。

「ソイツ 仲田ケンジは剣道部のツレで副主将。就職先も決まってるヒマしとるから、今年大学祭実行委員のミスコン担当しとんのだや」

「ああそれで…」

哀が視線を送ると、仲田は必死になって哀に迫る。

「そうなんだよっ今回、初の一般参加枠が出来ただけで、みんな尻込みしてなかなか参加してくれないんだよっ」

「そついや、今年は確か大本命っちゅー女がおったな？」

「そうそう！文学部3年の椎名さん！事前投票ダントツでさーアイドル系で可愛いよなーあのコ。そいや服部に気があるって噂もあるんだけど、まさかねー」

「ホンマまさかや。向こうオレの顔も知らんのんちゃうんか？ありえんやろ。まだ工藤相手の方が信憑性あるわ」

「とにかくっ！そのせいで『私なんて』ってみんな断ってくるんだよーこのままだとミスコン担当の名折れ！天下の東都大の名誉が！ひいてはオレの内申が！」

「ソコかい」

「……………ある意味すがすがしいくらい正直ね」

「それは冗談として置いとくとして…」

（（いやいや心底、限りなく果てしなく本気だし））

二人の心のツツコミをよそに、仲田はテーブルに手をつき、ガンツ、と音がするくらい頭を下げる。

「このとーり！お願いしますー！！」

「アカン」

すげなく断る平次。まさに一刀両断。

「服部に聞いてね　　！」

涙目で噛みつき、平次の顔をグキツと反らせる。そしてちゃっかり哀の手を握りしめ訴えかける。

「お願い助けると思つてっつ！！」

「断るわ」

「アツサリ！？」

「服部君も知つてるけれど、そういう派手なの私嫌いな。あと、

初対面の貴方の内申点に一役買っ義理もないし」

「うわ直球」

「変化球でも同じ答えだもの。するだけ無駄だわ。良いじゃない、大本命がいるのなら。そんな可愛いコが出場するなら、皆が尻込みする気持ちもわかるわ。大体、大学祭のミスコンに小学生が出るなんて、いい物笑いの種よ」

哀は冷たく淡々と話す。平次はある意味感心していた。初対面の小学生に軽くあしらわれて、ちっともめげた様子のない仲田に。

（なかなかの大物かもしれんなあ）

としみじみ思いつつ、コーヒーを飲む。哀の煎れたコーヒーの方が数倍美味いが仕方ない。二人の話はまだ続いている。仲田はある意味勇者だ。

「どうしても…?」

「どうしても。」

「絶対?」

「絶対。」

「……………ミスにはプラダの新作、準ミスにはフサエシリーズの限定品、もし参加してくれたら僕からCHANELの限定ポーチ」

「後学の為に出てみてもいいかしらね」

「哀チャ　ン!!!?」

「交渉成立」

「参加だけでいいのなら」

啞然とした平次をはさんで、二人は固く握手を交わした。

前編へ勇者降臨！（後書き）

読んで頂けて嬉しいです。後編もよろしくお願い致します。

中編／ヒーロー見参！（前書き）

中編です。平次も哀嬢も新一も仲田（↑誰だよ）も、みんな大好きと再認識しました。引き続き読んで頂けましたら嬉しいです！よろしくお願い致します！

中編／ヒーロー見参！

大至急エントリーを済ませ、三人で会場となっているメインキヤンパスに向かう。

先を急ぐ仲田の後を歩きながら、平次が声を潜めて言う。

「…ホンマに出る言うなんて思わなかったわ」

平次は苦々しく頭に手を遣った。目は恨みがましく哀を見ている。

「……………何、拗ねてるのよ」

「今日は色々プランたてとったんや。昼からあっち回ってこっち回ってゝってな。全部台無しやん」

「あら、貴方の友達の窮地を救ったつもりだったんだけれど？」

「モノに釣られたんやろ」

「気のせいよ」

こんなことなら、とつととトンスラすれば良かったと叫んでも後の祭り。小声でポンポン言い合い続ける二人に、

「しかし服部にこんなに可愛い知り合いがいたなんてな。で、どんな関係？」

と、先を歩いていた仲田が振り返って聞いてくる。哀は平次をチラリと横目で見る。

「……………隣に住んでるコや」

「へえっ服部ラッキーだったね！あれ？でも服部確か工藤と同居してたよね？もしかして工藤とも知り合い？」

「ええ。彼が一番長い付き合いかしら」

「じゃあ工藤もびっくりするんじゃない？哀ちゃんがミスコンに参加したら」

哀が愕然と立ち止まる。

「——彼、来てるの？」

「当たり前じゃん、工藤も東都大生なのに。今日は幼なじみを連れて来てるみたいだし、推理研究会の方も手伝うって言ってたし、忙しそうだけど。でもメインキャンパスはどの学舎から見えるからね、ミスコンの様子は工藤も見てるよ、きっと。友人のオレが企画司会だし！」

呆然と立ち止まったままの哀を、平次が半眼で見つめて溜め息をつく。

「……自分、考えてへんかったな？」

「……うかつだったわ……」

これからの展開を思い、二人で盛大な溜め息を落とした。

三人は、人でごったがえした会場に到着する。哀はあまりの熱気に立ちすくんだ。皆、手に何かの用紙やパンフレットを持ち、中に

は鉢巻きをした者もいる。まるでアイドルのコンサート会場だ。

「うわあ凄い人混み！こりや前評判上々だね！あ、哀ちゃん、あと30分で始まるから、ステージ脇に来てくれる？じゃな！服部！」こっちこっち、と仲田は哀を引っ張って行った。

「まず、7人の事前投票で選ばれた大学の女のコが登場して、その後一般エントリーの3人。3人しか集まらなかったんだよね。」哀ちゃん最後でいいよね？聞くのは簡単なプロフィールと趣味。あと、特技披露があるんだ。簡単なのでいいから、何かある？オレ司会者だから、できるだけフォロースるから！大丈夫！哀ちゃん、言っちゃんだけど、メチャ可愛いから！小学生には絶対見えないし、今日のカッコなら下手したら高校生！自信持ってね！」

仲田は哀の肩をポンと叩くと、憎めない笑顔を向けて、ステージ上に打ち合わせに上がって行った。

（早まったかしら……）

哀は溜め息をつき、ステージ脇の壁にもたれかかった。周りを見渡す。自分を含めて10名。それぞれの気合いが入りまくった化粧と服装を見て、更に大きな溜め息をつく。

「——あら、なあにこのコ。迷子？」

顔を上げると、ばっちりフルメイクの派手な女の人が立っていた。甘ったるい香水の匂いが周りに充満する。

「ま・さ・か、ミスコンに参加するコじゃあないわよね？あなた、年いくつ？お父さんやお母さんは？」

嫌な感じの笑いと共に顔を覗き込まれる。周りからも失笑が起こり

「村岸先輩？ちょっと言い過ぎですよ？」

二人の間に、髪を綺麗に巻いた女の人が立ち塞がった。『大丈夫？』と小声で哀に囁いてくる。チラリと見えた横顔は、これぞ男達の庇護本能をくすぐる、といった感じに可愛らしい。

「何？椎名…前から思ってたけど、アナタちょっと調子のおつてるんじゃない？本命だかなんだか知らないけど、いつか痛い目にあうわよ？」

「ご忠告ありがとうございます、でもそれとこれとは違いますよね？…このコに謝って下さい」

「——な！」

顔を真っ赤にした村岸が、椎名と哀に掴みかかろうとした時だった。

「哀ちゃん？……なんやどないしたんや？」

「「服部君！？」」

「…え？服部先輩？」

焦って小声で言い訳をする女性陣を無視し、平次が哀に近寄ってきた。椎名が戸惑いがちに、哀と平次を見比べる。

「哀ちゃん、ちょお渡し忘れたんがあつてな、アツチ行こか？」

——椎名サンやつけ？サンキュな？平次がそつと囁いて、哀の背中を押しながら少し離れた。

後ろからは『何あのコ！服部君の知り合い！？やっぱあゝい』と数人の焦った声が聞こえてきた。

「…平気か？」

「大丈夫よ。馬鹿馬鹿しくて可愛らしいくらいだわ。……どうしてここに来たの？」

「仲田がステージから合図送ってきたんや。……スマンな、終わったらドコにでも連れてったるから、もうちょい辛抱してな？」

「服部君のせいじゃないじゃない」

「ええから！……一番前で見とるから。頑張つて来いや？」

「ええ」

哀は頭をゆっくり撫でられ、くすぐったそうに笑った。

中編「ヒーロー見参！」（後書き）

村岸さんは、嫁に行った親友の新しい名字です。……すまん村岸……
……

後編 真の勇者誕生！（前書き）

引き続き楽しんで頂けたら、とってもとっても嬉しいです！

後編　真の勇者誕生！

『さーあ、ご来場の皆様！今年もやってまいりました！お待ちかね、ミス東都大学コンテスト……！！』

『うおおおおお……！！』

『例年通り、事前投票で選ばれました7名と、今年は一般から3名がエントリー！この3名はいずれも、東都大内にて本日もスカウトした方々です！皆様、お手元に投票用紙はお持ちですか？一番気に入った女のコの名前を書いて、投票して下さいね！選ばれたミス東都からは、皆様にびっくりイベントがあるかもしれません！最後まで！楽しんでくれよう……！！！！イエア！』

『うおおおおお……！！イエア……！！』

『早速行くぞ　　！皆、テンションあげて！トコトンついてきやがれ　　！！エントリーナンバー1番……！！』

（……仲田、ヒト変わっとなるやん）

背後からの鬼気迫る光景と萌えオーラに、平次はガラガラ冷や汗を流す。

目の前では次々と女のコが、仲田を相手にプロフィールを話し、特技を披露していく。日舞、ダンス、暗記、ピアノ……そのたびに背後からの大歓声……

大本命とかいう椎名も、一際大きな歓声を浴びて登場した。お嬢様風の上品な服装に、アクセサリ。化粧はしっかりしているが派手ではなく、本当に守ってあげたいといった印象だ。一瞬平次と目があつた様に思ったが気のせいだろうと、引き続きステージを見上げる。

（オレ、この雰囲気、最後まで耐えれるやるか……………）

思わず青い空を見上げた。

『さーあ！いよいよ最後の一人となりました！エントリーナンバー10番、灰原哀ちゃんです！すー！』

瞬間、会場がザワリと揺れた。

次いで、感嘆の溜め息、歓声、幾多ものフラッシュ音――

視線は、ステージ上に立つ、その華奢な姿に注がれていた。

大人になりきれていない、少女の姿。

整った、ミステリアスな顔立ち。抜ける様な白い肌。

柔らかな陽に映える、赤みがかった髪は背の半ばまでを流れている。落ち着いた緋色のワンピースに、襟元に白いファーを巻き、細い足にぴったりとしたブーツは編み上げになっており、彼女の仕草にあわせてリボンがひらひらと揺れている。

きつと大人になったら壮絶な美人になると思われるその姿は、今は知的で儚く清楚な印象を与えた。

ステージの真ん中に立ち、真っ直ぐ前を見る。会場に溢れんばかりの観衆を相手に、全く怯む様子はない。

（うわぁ～たまらん、持ってかえりたいわアレは…他の女らより断然可愛いんちゃうか～）

ステージ上では、仲田と哀が淡々とプロフィールを話している。

（……そっぴや特技披露って何やるんや？まさか研究論文や開発した薬発表する訳にはいかんやろし、銃の腕披露する訳にもなあ……他に何かあったか？？知らんねんけど……）

『では哀ちゃん、特技って何かありますか？』

『特に……』

『そう言わないで！何かあるでしょ？（ボソリと小声で）良いよこの際、九々の暗唱でも……フォローするから！』

貴方、私を馬鹿にしてるの？という冷たい目線が仲田に注がれ、平次も苦笑いを漏らす。九々どころか、哀は円周率をエンドレスで暗唱できる。本当にどこまで憶えているのか謎だ。ただ、以前一度実践された時には、余りの眠気に3時間程でリタイアしてしまった。

『……………そうね、じゃあ……………』

哀は軽く首を傾げて、会場を一通り見渡す。

『怪盗キッドとお友達』

「「「『はあっ！？？』」「「「

『な～んてね』

『もつびつくりしたよ哀ちゃん～冗談やめて特技披露の話なんだけどね……』

「お呼びでしょうか姫君？」

突然広がる真紅の薔薇吹雪。刹那ステージが覆われ、晴れたその先には――

「『怪盗キッド！！？』」

風にたなびく白いマント、シルクハット、上げた顔にはモノクル。口元にはいつものシニカルな笑み。

伝説に名を残す名怪盗、正式名称『怪盗1412号』、“月下の奇術師”こと怪盗キッドがその姿を現していた。

最近では以前ほど人前には現れず、盗みもするがそれは決まって悪人からであり、逆に警察に協力して凶悪犯罪を解決する事もある。謎だらけの鮮やかなる怪盗に、ますます熱狂的なファンは増えている。事実、会場はどよめきと黄色い歓声に溢れんばかり。

「キッド！？あんクソボケ何を…！」

哀に駆け寄ろうとした平次だが、後ろから観衆に押されて身動きがとれない。

ステージ上では、呆然とする仲田をよそに、キッドが跪き、哀の手に口付けを落とす。観客達の悲鳴が更に大きくなる。

『あ…あの、本物？』

マイクを向ける仲田に、（勇者だ仲田！）と観客一同。

『ええ、勿論です。月夜の晩ではありませんが、愛しの姫君のお呼びとあらば、何処にでも参上致します』

『ま…まさか！彼氏なんですか　！？』

仲田の叫びに、会場が騒然となる。天下の東都大のミスコンとあって、相当な数のマスコミもいたのだが、スクープ！とばかりにフラッシュをたき、出版社やテレビ局に連絡している。皆一様に脳裏に浮かぶのは（キッド初の私生活暴露！恋人宣言！？）だったりする。

『いいえ、私はとるにたらない憐れな怪盗…何年も一途に愛を囁いているのですが、なかなか私に応えて下さいません』

言いながら手元からポンポンと真紅の薔薇が飛び出てくる。それはやがて花束の大きさになり、何処から出したのか大きく柔らかなレースで薔薇をくるみ、リボンを結わえ、哀に恭しく差し出す。

『私の、たった一人の姫君に…』

キヤ

！！！！！！

もはや收拾がつかない。キッドは『ではまた月夜の晩に』と哀の頬に口付けを落とし、薔薇の煙幕と共にステージから消えた。

太陽は早、西に傾きつつある中、東都大のメインキャンパスは引き続き濃い熱気に包まれていた。男女問わず、興奮気味に周囲と語り合う姿がいたるところで見られる。噂が噂を呼び、白い怪盗を見逃した人達も集まってきて、とんでもない状況になっている。

『え、かつてない盛り上がりを見た、東都大学祭メインイベント・ミスコン！皆様大変長らくお待たせしました！集計結果発表です！！』

どよめき、拍手に口笛、沸き起こる歓声。仲田君素敵と便乗声援まで飛び交い、ありがとう！と応えて手を振る余裕の司会者。本当に過去例をみない盛り上がりだ。

『栄えある、本年度ミス東都の栄誉を掴んだのは
ナンバー10番！灰原哀ちゃ　ん！！！！』
エントリ

割れんばかりの拍手歓声。

舞台上では、本命と言われていた椎名が微笑みながら拍手を送っている。

目を見開き驚く哀の頭上にティアラが置かれ、緋色のマントにトロフィーが渡される。仲田から受け取った花束と、キッドから受け取

った薔薇の花束の両方を抱えた哀が、柔らかに微笑んだ。

『では、本年度ミス東都からのびつくりイベント!!このステージからミス東都を、お姫様抱っこして退場だああああ!!』

『おおおおおお!!』

『その勇者は、ミス東都ご指名の者ただ一人!さあ哀ちゃん!ご指名ドゾ　!!』

会場が固唾を呑む。誰だ?俺か?いやオレだよ!こつち見て!もしやまたキッドが出て来るんじゃない!?様々な憶測をよぶ。

コシヨコシヨコシヨ…

哀が仲田の耳元で囁く。その状況ですら、男性観客からブーイングが起こる。

『ハ―イ!ご指名!我が大学きつての有名人の一人!東都大4年、服部平次君!!君が勇者ダ　!!』

地鳴りのような歓声悲鳴ブーイングの嵐の中、周りから揉みくちやにされ小突き回されつつ、平次はステージに飛び乗る。

哀は目の前で可愛らしく小首を傾げる。本人無意識の仕草に、平次

は何も言えずにこっそり溜め息を吐く。

「……運んでくれる？」

「……当たり前やろ？いちいち確認するコトかいな」

よっこらせ、と羽根の様な身体を抱き上げる。

『ミス東都！彼を勇者に選んだ理由は！？』

マイクを向けられ、哀は少し考えて…

『いつも抱いてもらってるから』

——雲一つない青空の中、学生達の歓声悲鳴絶叫が響き渡った

「あゝもゝなんやこの騒ぎ…多分コレ今晚のトップニュースちゃうんか？」

あれから平次と哀はあらためて学内を散策しているのだが、注目されること注目されること。行く先々で『あ』やら『近くで見るともつと可愛い』とか『ロリコン』（！？）やら『付き合って下さい』（寝言は寝て言えドアホ）とか……………平次の両手には、屋台の店番の野郎共から哀への、下心と愛のこもった捧げモノ（ヤキソバやらたこ焼きやらクレープやら）がぶら下がっている。

「……………大体、最後のセリフってなんやねん……………明日からめっちゃ大騒ぎやねんけど……………」

「あら、本当の事じゃあない？出会ってから何度、頭を撫でられ抱き上げられ添い寝され……………」

「もーエエ。オレが悪かった。謝る。明日からの荊の道も耐えたるわ」

男や服部平次。人の噂も45日…あれ？75日？どつちやでもええわ100日以内やる。直ぐや直ぐ。

遠い目で空を眺める。

「…しかしなんやねんアレ、キッドと打ち合わせとったんかいな」

「そんな訳ないじゃない」

「その割にはなんや、計ったようなタイミングやったでアレは」

哀の台詞と共に登場したキッド。まるで哀を見守っていたかの様な…

「……………なんだが、あの場に、彼がいる様な気がしたの」

まただ。

平次の脳裏に、あの怒涛の日々が蘇る。工藤の傍に寄り添う哀——
——それを見守っていたキッド。

いつもそうだ。哀とキッドと工藤——彼らにしか分かち合えない
何かがあるのか——

平次は少し、取り残された気分になる。

最後に哀が頼るのは、自分ではなく、工藤やキッドなのかと。

「服部君？」

無言になった平次の袖を、哀はくいくいと引つ張った。
少し躊躇い、そつと口を開く。

「今日は、楽しかったわ？呼んでくれて、一緒に歩いてくれて、ありがとう」

（——アカン、泣きそうや）

心の中にあつた何かが取り除かれて暖かくなつた様な気がする。理屈じゃない、これから何度も、何度も何度も同じ事で悩んでも、たったこれだけで——彼女のほんの一言だけで自分はきつと大丈夫だ。

「——どういたしましてやな。けどな、今日は一日まだ終わってへん、なんやかんやで全然回れてへんし。工藤にも会いにいかな才し殺されるわ。後夜祭もあるし一緒に参加していったらエエ。なんたつて『ミス東都』や！夜遅なつても帰りは、この紳士で勇者な才

レが家まで送つたるから。安心して任せえな」

「ええ、ありがとう」

——でも、家隣りじゃないの。送るんじゃない、二人一緒に帰るのよね？

哀は軽やかにクスクス笑う。

両手の塞がった平次のかわりに、きゅっと平次の袖を握る。

隣で柔らかく微笑んで、そっと見上げてくる。

平次は優しく笑って哀の仕草に応え、ゆっくりと歩き出した。

後編／真の勇者誕生！（後書き）

もう、なんだか満足です…↑燃え尽き

『一日シリーズ』（？）の中では、哀嬢はスーパーガール（でも悩みアリ）です。

しかしこれで付き合っていないこの二人…謎です（笑）

実はその後の話（オマケ？）もあるのですが、いつも本編には影しか描かれない新一が登場…なので、もしアップできたら読んでやって下さい！

初めて完結して、自分なりに本当に嬉しいです。長くなりましたが、ここまで読んで頂けて、本当に本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5570b/>

東都大学大騒動～平次と哀の一日～

2010年10月9日03時23分発行